

第1回 講義録

平成 21 年 10 月 30 日 (金) 18:30~20:30

川崎区役所 7 階第 1 会議室

「川崎の都市化と耕地整理」

長島 保 (地域史研究家)

講師経歴

県立川崎高校で長く教鞭をとる。退職後は地域史研究家としてかわさき市民アカデミー、各区市民館での講座、川崎区誌研究会の運営、川崎市史の編纂などに携る。現在はNPO法人多摩川エコミュージアム理事、かわさき産業ミュージアム専門委員、かわさき市民アカデミー副学長などで幅広く活動。

【前置き】

今日は私が 10 数年前に市史の関係で調べた耕地整理の話をさせていただきたいと思います。

大分時も経っており、私もその後他の仕事に忙殺されていて、その後、耕地整理の研究を進化させられないまま今日に至っているのですが、「川崎市史 近代編」の中に川崎の耕地整理と道路のことを取り上げ、多少書いたことがあります。その市史編纂の途上で「川崎市市史研究」という雑誌を編纂委員会で出しており、その 7 号に「多摩川下流域の都市化と耕地整理」という文章を書かせていただいたこともあります。今日はこの論文と「川崎市史 近代編」の一部を使いながらお話させていただきたいと思います。

川崎の都市化、市街化に耕地整理が重要な要素を占めたということは、これまであまり論じられてきませんでした。耕地整理は顕然と行われたのですが、資料があまり手に入らないということで、研究も進まなかったのだらうと思います。幸い私は市史の編纂に関わりました時に、川崎市市の書庫、地下の倉庫の中にあつた耕地整理関係の眠っていた資料を見せていただくことができました。ただし、条件付でした。耕地整理というのは、行政がやったのではなく、土地の所有者たちが組合をつくって、自分達の地域を区画整理していったものです。資料には関わった地主の方々の名前と同時に、一人一人の方々がどれだけの土地を持っていたかということが、一覧として出てきています。その中には現存されている方のお父さんやお爺さんのお名前もたくさん出てきます。こうした資料は、最近個人情報保護の問題も厳しいため、公開できないということで、特に個人名に関わる箇所については、十分扱いに注意してくれ、ということでした。今も尚、これらの資料は書庫に眠っており、これからも当分は門外不出の資料であると思います。我々が生きている間は再び日の目を見ることはないでしょう。遠い先には、公文書館に預けられ、見られるようになるかもしれません。

私はこうした耕地整理の組合関係の資料を本当に夢中になって読ませていただきました。資料は持ち帰ることは許されず、ある場所に通う形をとりました。それでも組合関係の資料がこれだけきちんと残っているというのはすごいことなんです。私は以前、大田区や世田谷区の耕地整理組合について調べており、浜松町にある東京都公文書館に通って資料を探したのですが、きちんとまとまっておらず、いろいろな資料の中から探す、非常に時間がかかる作業でした。その結果、大田から世田谷にかけて、何年頃にどんな耕地整理の組合ができ、誰が参加して、組合長は誰といったような程度のことは分かりました。しかし川崎の場合のような組合の文書はほとんど残っておらず、届け出を受理した側の東京都側の

資料が一部残っているだけでした。たかだか今から何十年か前の事業の資料なのですが、それがきちんと保存されているということは意外にないのです。耕地整理がどのように展開され、今の街区とどういふふうにつながりながら進んできたのか、はっきりさせていくことはこれからの課題です。多摩川流域で私が最初にそういったことに取り組んだのです。対岸の大田区側については、大田区教育委員会が出した地図集に、付録として一覧表を載せさせていただきました。

私は多摩川の両岸から、耕地整理組合がどのように展開されたのかということを通して、多摩川流域の開発と都市化を考えてきました。その中で、耕地整理が盛んに行われていると同時に国よって行われた多摩川の改修事業と耕地整理が密接な関係を持ちながら進められてきたこともわかりました。

今日は川崎の都市化の中で耕地整理がどのような役割を果たしてきたのか、アウトラインをお示しするとともに、多摩川の改修との関わりの中でどう展開されたのか、それからなぜ市街化が耕地整理という手法で行われたのか、耕地整理というからには農耕地、田んぼと畑なんですが、この整理がなぜ市街化と関わってきたのか、以上の大きな3つの点に絞って話をさせていただきたいと思います。

(1) 多摩川下流域の都市化

川崎の都市化と耕地整理

まず耕地整理が展開される前に、この川崎の多摩川流域に近代工場が次々にやってきます。写真は、昨年（平成20年）の7月7日にできたガイド板です。細かくは見えないかもしれませんが、「工業都市川崎発祥の地」という案内板です。川崎駅前西口の産業振興会館の前に設置されています。昨年は、実は工業都市川崎が産声をあげてからちょうど100年の年でした。その100年を記念すると共に、この周辺が再開発され、産業振興会館ができてから、20年の節目の年でもありました。この20年と100年が重なったことが幸いしてできた碑です。そして、この場所は工都川崎発祥の地だけでなく、京浜工業地帯発祥の地と言っても言いすぎでない、そういう歴史的な場所なんです。



「工業都市川崎発祥の地」

初の川崎進出近代工場

初の川崎進出近代工場、横浜精糖（数年後明治製糖に合併）川崎工場です。写真は、大正9年の頃です。明治40年に工場を完成させ、翌41年から操業しています。明治41年は1908年ですから、2008年がちょうど100年ということです。先ほどの案内板の場所は、この明治製糖があった場所です。明治製糖と並んで、子会社であった明治製菓もありました。その跡地の再開発では川崎市が行政指導し、街区開発を行いました。街区の名前もついているのですが、一般市民に聞いて



明治製糖川崎工場（大正9年ごろ）
「創立十五周年記念写真帖」より

もなかなかその名前を答えられません。「かわさきテクノピア」といいます。

余談になりますが、川崎の海の方には「シビルポートアイランド」という場所もあります。御存知でしょうか？いずれも行政がつけた名前であり流行っていません。最近はそのじゃいけないということで、市民から公募して名前をつけるようになってきています。ラゾーナというのはみなさん覚えてますね。あれも開発者がつけていたら、今ほどの知名度はなかったのかもしれない。この「かわさきテクノピア」の開発に中心的に携わられた行政職員の方は後に川崎区長にもなられています。その方が現在、産業振興会館の財団理事長です。どうも川崎市は再開発をしていた頃は、ここがそんな由緒ある歴史をもつ場所だとは知らなかった節があります。後で私がいろいろ言い始めてから、これはなんとか後世に伝えなければということになりました。私が書いていたある新聞への連載に、ここにモニュメントがぜひ必要だということを書かせていただいたところ、川崎市の工業会の方から電話があり、「ぜひ建てたい、なんならお金も出しても良い」ということで、話が進みました。大学の先生方なども集まってなんとかしようじゃないかということで、ようやく昨年実現したものです。

川崎は新しい所をどんどん造っているのですが、それで歴史を忘れてしまっはいけないと思います。最近歴史をまちづくりの中に取り込もうという動きが出てきています。来年度は二ヶ領用水ができて400年の年になりますが、今この歴史を活かしているいろいろやっという動きが既に始まっています。川崎に進出してきた工場が、まず多摩川のふちにやってきたということに注目していただきたいです。川崎の工業化、都市化は多摩川から始まったのです。

明治製糖が初の近代工場の進出というお話をしましたが、厳密にはもっと早く、ある近代工場が多摩川の岸辺に来ています。横浜煉瓦製造会社で、明治21(1888)年のことです。10年後には増山周三郎という方が受け継いで御幸煉瓦製造場になります。ホフマン式と呼ばれる丸い大きな窯をドイツから持ってきて、赤煉瓦をどんどん製造します。ここで造られた赤煉瓦がどこで使われたか、これはもっと追究されなければならないと思っているのですが、それを研究されていた大西さんという方が残念ながら亡くなってしまいました。研究の後を誰かが継がなければならないと思います。とにかく明治21年に最初の近代工場が来ているのですが、私はこれを工都川崎の始まりとは言っていません。なぜかという、工都川崎になっていくには、そこにひとつの工業地帯を形成していくという動きにならないといけないと思うからです。

東京電気川崎工場

明治製糖が来た同じ年には、その隣に東京電気川崎工場が完成しています。現在の東芝の前身です。操業はその翌年のことでした。明治製糖よりも1年遅れということになりますが、実はこちらの方が早くから川崎に来ようという計画を立てていました。



東京電気川崎工場

逗子から移転した味の素

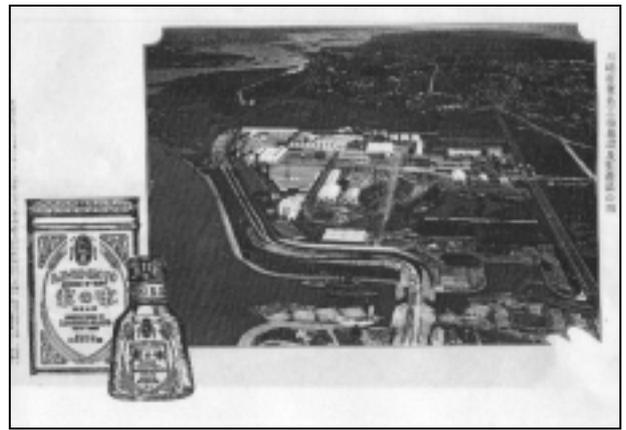
さらに、逗子から味の素も移転してきます。逗子でくさいガスときたない廃液を垂れ流し、「高貴なお方の海を汚してはけしからん」といわれて、移転してきました。逗子の隣の葉山町には、高貴なお方の別荘がありますね。これでは出て行かざるを得ません。最初は六郷の方に新しい工場を建てようとしたのですが、そこでも「そんなの建てられちゃ困る」といわれ、その時に川崎の地主たちが「こっちにきなよ」と呼んだんです。次の写真は昭和5、6年頃、工場を上から見た図です。当初はまだ空き地も

多く、現在の10分の1くらいの敷地しか工場はありませんでしたが、写真の頃は工場もかなり大きくなってきています。川崎に来たときは鈴木商店という名前で、味の素という名前になったのは、ずっと後のことです。

味の素の前に、日本蓄音機商会、後の日本コロムビアもやってきます。大正に入り、富士瓦斯紡績が大正4（1915）年に来ています。

ところでなぜ富士紡績ではなく富士瓦斯紡績なのでしょう。ガスを製造したのかと思われる方もいるかもしれませんが。実は富士紡績と東京瓦斯紡績という会社が合併して、両方の名前を取り合ったのです。瓦斯紡績とは何かというと、女性の方は御存知かもしれませんが、撚られた木綿の糸、綿糸のちょっと毛羽立ったところをガスで焼いてすべすべにした物をガス糸と言いました。綿糸よりもちょっと上等な糸になるのでしょうか。そうしたガス糸を紡いだり、それを基に織物をつくる瓦斯紡績という分野がありました。

更には大正6（1917）年に、大師河原に富士製鋼が来ます。後の新日本製鉄です。つい最近までは日鉄建材という工場でした。今は立ち退いてしまい、再開発の対象になっています。多摩川の沿岸にどんどん工場が進出してきて、臨海地帯の方へ広がっていったのです。



味の素工場（昭和5年頃）

多摩川沿岸に近代工場が進出した理由

耕地整理がされる前に川崎では、多摩川沿岸に近代工場がどんどん来ています。なぜ多摩川の沿岸だったのでしょうか。一つは河原の土地の値段が非常に安かったからです。大水が出る度に水溜りができ、明治時代には大変な災害も発生していた河原の土地を安く大量に買い占めたのです。また工場用に、そういう土地をまとめて安く提供する地主が川崎にいたということです。そうした地主の筆頭が、後に川崎市の市長になられた石井泰助さんです。明治製糖が来たときはまだ動いていなかったようですが、東京電気が来るときには、石井さんが盛んに周りの地主たちにも働きかけて土地の斡旋を行いました。味の素に来なさいよと言ったのも石井泰助さんたち地主たちです。富士瓦斯紡績を誘致するときには、町をあげての大運動をしたそうです。企業が来るたびに土地の値段が少しずつ上がったようです。例えば、明治製糖が来たときは坪1円でしたが、次の東京電気が来たときは1円20銭でした。そして、富士瓦斯紡績の時は1円40銭になっていました。地主の人たちにとっては、自分達もっていたただ同然の土地が、どんどん売れていくという旨みがありました。石井泰助さんは地主であると同時に、吹田屋と言う屋号の材木屋さんでした。後には製材や植林の事業などにも手を出していますが、そういうことをしながら、土地の集積をした大地主でした。後に川崎で耕地整理組合がどんどん成立していった時も、その組合長はほとんど石井泰助さんがおやりになっています。

多摩川の沿岸に工場がどんどん来たもう一つの理由は、多摩川の水運です。

これは明治製糖のテレファースの写真です。テレファースとは、舢（はしけ＝小船）で積んできた原料等を自動操縦で陸揚げする鉄骨の施設です。明治製糖では、精製する砂糖の前の粗糖を外国から輸入していました。大型船でまず横浜港まで運んで来て、そこから舢に積み替え、多摩川を上って陸揚げしていました。最初は



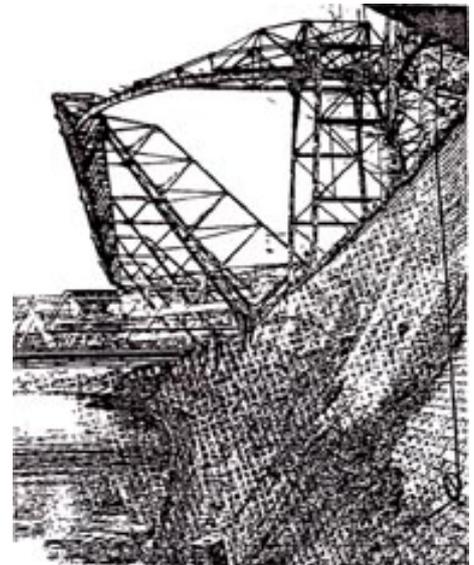
テレファースでの陸揚げ作業

クレーンでの陸揚げでした。先ほどの大正9年の工場の写真にはテレファーがありません。クレーンが2箇所があり、護岸も石の護岸ではなく、杭を打ったものでした。テレファーの無い写真は古い物だなど思っていたいただいてまちがいないと思います。そのあたりも写真でぜひ比較してみてください。右の写真は、昭和54(1979)年まであったというテレファーです。私も見たことがあり、「何をするものなのだろう」と思っていました。戦後はほとんど使っていなかったようです。

日鉄建材、富士製綱の荷揚げ施設は、大型の鋼材を持ち上げますからクレーンそのものが非常に大型です。傍らには軽便鉄道まであったようです。

富士瓦斯紡績は、多摩川からちょっと離れていましたが、河原に荷揚げ場を持っており、そこからトロックで運んでいました。東京電気も荷揚げ場と工場の間はトロックで輸送していました。このように多摩川の近くに来た工場は、原材料は船で運んで来て、工場に搬入していました。

後にトラックが普及したり、鉄道の引込み線が整備されていきますが、当初の近代工業は水運に依拠して始まったのです。さらには海岸の方を埋め立て、今度は舳ではなく、大型船がそのまま横付けできるような工業地帯をつくるんだということで、埋立地が形成されます。これを率先してやったのが、浅野総一郎です。その後県営・市営の埋め立ても始まり、京浜工業地帯が生まれます。ですから京浜工業地帯は多摩川から始まって、海へと広がり、そして更に東京や横浜の方へ延びていくという成り立ちでした。私たちが子どもの頃に習った4大工業地帯の一つは、まさに川崎が中核となった工業地帯でした。



昭和54(1979)年ごろまであった明治製糖テレファー



工場の河岸とトロック引き込み線

(2) 多摩川下流域の耕地整理事業

工場が来てまちがどんどん発達していく川崎に比べて、世田谷区、大田区というのは開発が遅れていました。田舎だったんです。川崎の大師電鉄沿線の人たちの家庭に電灯が灯った時、大田区や世田谷区はまだまだランプの暮らしでした。ところが、そういう大田区や世田谷区が、今度は川崎よりも早く耕地整理を始めます。ようやく耕地整理の話になりました。前置きが長くなってしまってますみません。

多摩川下流域での耕地整理組合一覧

明治42(1909)年に、耕地整理法という法律が制定されます。耕地整理というのは農耕地の改良や造成を言います。耕地整理法の最初の目的の所には、「土地の農業上の利用を増進させる」とあります。つまり農業に関わる、農耕地のための法律でした。これがなぜ都市の区画整理に使われたのでしょうか。それを解く前に、多摩川両岸で行われた耕地整理について概観してみましよう。

〔長島保「多摩川下流域の都市化と耕地整理」(川崎市史研究・第7号所収)から〕

多摩川下流域における耕地整理組合設立一覧

| | 多摩川右岸 | 多摩川左岸 |
|-------------|----------------|-------------------|
| 1912(明治45)年 | | 玉川 |
| 1915(大正4)年 | 中原村記念 | 新井宿・大典記念玉川 |
| 1916(大正5)年 | | 羽田尾崎共同・入新井第3 |
| 1917(大正6)年 | 川崎町第1 | 大森 |
| 1918(大正7)年 | | 池上蒲田矢口連合・六郷村・蒲田 |
| 1919(大正8)年 | 田島村第1 | 羽田第1 |
| 1920(大正9)年 | 川崎町第2 | 大森第2・入新井第4 |
| 1921(大正10)年 | 御幸 | 羽田第3・馬込村東 |
| 1922(大正11)年 | 川崎町第3 | 馬込村谷中・羽田第2・池上村 |
| | | 調布村上沼部・大森第3 |
| | | 田園都市一人施行 |
| 1923(大正12)年 | | 六郷村堤外・矢口村 |
| | | 池上徳持・調布村・馬込第1 |
| 1924(大正13)年 | 田島町第2・川崎市川崎町第4 | 調布村第2(下沼部) |
| | | 調布村上沼部第2・千束 |
| 1925(大正14)年 | 田島町堤外・大師河原第1 | 玉川全円 |
| 1926(大正15)年 | 田島町大島・中原町上丸子小杉 | 池上西部・嶺 |
| | 川崎市大師河原第2 | |
| | 川崎市大師河原第3 | |
| 1927(昭和2)年 | 中原町木月一人施行 | 羽田第4・下丸子・鶴ノ木 |
| | 上平間第1 | |
| 1928(昭和3)年 | 塚越古川戸手 | 横須賀 |
| | 中原町第2・戸手 | |
| 1929(昭和4)年 | 塚越・中原町小杉・渡田塩浜 | 馬込第2・羽田御台場 |
| | 中原町木月 | 羽田堤外 |
| 1930(昭和5)年 | 森田・森山下 | 大森東部 |
| 1931(昭和6)年 | | 馬込第3・矢口町上根岸 |
| 1932(昭和7)年 | 中原町伊勢台 | 矢口町中河原・森鶴・森ヶ崎一人施行 |

〔『東京都公報』・東京市役所『都市計画道路と土地区画整理』・『神奈川県公報』・『川崎市耕地整理組合関係書類』・『川崎都市問題参考図表』などから作成〕

対岸の今の世田谷では、制定3年後の明治45（1912）年に玉川村で、東京府の府会議員をやっていた豊田周作という人物が中心になり、かなり広い地域にわたって、玉川村から現在の大田区側の一部にかかるくらいの広さで耕地整理が行われました。

大田区での最初の耕地整理は、新井宿の耕地整理です。これは今の大森駅の周辺です。

右岸の表の一番上には「中原村記念」という耕地整理組合がありますが、この記念というのは御大典記念です。御大典というのは明治から大正に変わって、新たな天皇が即位されたことを記念したものです。川崎側では中原村が一番早かったですね。その後、川崎町の第1耕地整理組合が、大正6（1917）年にできています。多摩川の川っ縁には農耕地はなく、どんどん工場ができてきていたのですが、後の市街地につながる地域の水田や畑の耕地整理が始まったのです。大正8（1919）年には、田島村でも第1の組合ができています。この頃の川崎町はどんどん人口が増えていましたが、田島村（田島町）の方が、人口の増え方の割合が多かったようです。ですから本来、大正13（1924）年に3町村が対等合併して、川崎市ができた時に、田島町も加わって4町で出発するのが当然だったのですが、田島町では横浜に入ろうという一派があつて分裂がおこり、合併できませんでした。しかし、川崎の方で市街化が始まり、工場化で労働者もどんどん増え、そのための住宅もつくらなければならないということで、急遽水道の建設が始まり、その水道が伸びてくるということで、田島の人たちはこの水道に乗る形で、昭和2年（1927）に川崎市に編入されます。この時は対等合併ではなく、編入でした。やがて御幸村でも耕地整理が始まります。これは右岸の川崎では最大の面積をもった耕地整理でした。現在の駅周辺の地域です。



大正11年頃の川崎臨海地帯

上は大正11年頃の地図で、今の幸区、南河原村の辺りで耕地整理が始まった頃です。大師河原の方は完成しておらず、まだ地図に載っていません。

耕地整理組合を大雑把に整理しますと、両岸とも3分の2が大正時代に成立しています。川崎の第1

から第4までの耕地整理組合の組合長はすべて石井泰助さんが務めています。石井泰助さんは川崎町の町長を3期やりました。そして初代川崎市長にもなります。川崎町の最後の町長は、小林五助さんです。市になるときは町長が市長になるケースが多いのですが、小林さんはならなかったというより、なれなかったのです。当時の市長は内務省が任命するのですが、その際には地元から候補者を3人推薦することになっていました。その3人はおそらく順番をつけて推薦したのだろうと思うのですが、石井泰助さんと、御幸村の矢島七蔵さんと、大師町の石渡幸蔵さんの3人でした。御幸村と大師町は、最後の町長がそのまま推薦された形でしたが、川崎町では現町長ではなく、元町長が推薦されたということです。

内務省から川崎に、市になる許可が下りたのは7月1日でしたが、市長がなかなか決まらず、川崎市の成立を祝う祝賀式等の行事は11月まで遅れました。県会議員選挙との係わり合いなどいろいろあったようですが、結構盛大に祝賀式典をやっていることが当時の新聞を読むとわかり、興味深いです。

石井さんは工場を誘致するために動いたり、水道整備においても非常に大きな力をふるっていたということで、川崎で一番実力者だったことから、初代市長になったのだと思います。この石井さんのお墓は、旭町の徳泉寺（とくせんじ）というお寺にあります。それから石井さんの功績を称えた彰徳碑が、この区役所のすぐ向かいの稲毛公園、稲毛神社の隣の公園内に建てられています。あまり知られていないようですが、今度あそこを通られたときはぜひ見てください。こちらから行きますと、公園入り口の左側に六郷橋の親柱が保存されていますが、そのずっと奥のほうに立っている大きな碑です。ただ漢文で書かれていて、今の人はなかなか中身がわかりません。本当は解説板が必要ですね。

最初の川崎町第1項地整理組合は大正6（1917）年に成立して、大正12年（1923）まで約6年かかって耕地整理事業を展開します。御承知のように川崎町は、東海道の川崎宿としてまち並みが発展してきた地域です。ところが、明治になって宿場が無くなってから寂れてしまい、なんとか活路を見出したということでもいろいろ試みます。お大師様への参詣客を目当てに商店街を活性化させようとかいろいろあったようです。そこで工場を誘致し、集まってくるようになった労働者を住まわせるための宅地の造成をしていこうという動きが耕地整理に基づいた区画整理で始まります。農耕地の改良ということを一応謳っていましたが、実質は水田を畑地に変え、やがては宅地にしていく。そういうことが多摩川の両岸で行われました。耕地整理の工事に関する写真資料等はほとんど残っていません。特に川崎側では、まだ私も見つけておらず、具体的な様子が分かっていません。どなたかの個人宅に眠っているかもしれません。大田区側では、耕地整理完成の時の記念帳が残っており、そこにいくつかの写真が載っておりまして、紹介させていただいたことがあります。

川崎の第1耕地整理組合は、総面積75町2反1畝4歩、筆数にして1,369筆、関係組合員総数277人という規模で耕地整理を行いました。耕地整理をする前は水田が60町で約8割、そして畑地が1反1畝、宅地が4町9反です。周辺の荒地なども整理するので、79町1反6畝20歩と土地が少し増えます。道路面積が2.7倍に増加しています。こういう初期の耕地整理は道路を基盤の目のように区切っていく、道路による区画整理です。水田がどのように畑地に変わったかはプロセスも数値もわかりません。おそらくかなりの水田が畑地に変わったと思います。

山田蔵太郎さんが書いた「川崎誌考」の中では、耕地整理が進んだ状況がこんな具合に書かれています。「東田、古屋敷、宮前等の桑田蒼海の変に異ならず、水田は忽ち住宅商店櫛比（しっぴ）の市街地と早変わり」。つまり住宅や商店が櫛の歯のように立ち並んだという記述です。

この写真の右手は多摩川です。遠くの方に見えている大きな建物は東京電気だと思います。右のちょっと先の方に六郷橋がありますから、久根崎から上流の方の写真です。昭和5、6年頃の写真です。「川崎市写真帖」という写真の本にあったもので、川崎の市街地が写っています。この写真を見ていただいても本当に住宅地が密集している様子がわかります。右側に何かネオン塔みたいな塔があるんですが、この塔をどなたか御存知の方いませんか？…ちょっとわからないですね。



多摩川沿いの市街地 昭和初期

川崎町の第2耕地整理組合、第3耕地整理組合は、面積的には少し小さくなります。特に第2耕地整理組合は、道路の面積がそれ以前の20倍になったと言われていています。川崎町の周辺は大正13年の第4耕地整理組合の事業が完成すると、ほとんどが市街化されてしまいました。耕地整理された後は、宅地としてすぐに売られ、個人住宅や共同住宅、長屋などが建っていったんだろうと思います。

田島地域では3つの組合ができました。大師地域でも3つの組合ができました。それぞれの面積は資料に書かれています。御幸地区では、総面積175町の右岸最大の組合ができ、組合長は御幸村の村長をなさった鳥養仁一（とりかいじんいち）さんでした。

大部分の耕地整理は、例外を除いて組合方式で行われました。土地の所有者が組合を組織して、県に事業認可の申請をし、県のお墨付きをもらってから事業に取り掛かる方式をとっていたのです。

川崎市の耕地整理組合について残されていた文書というのは、実は県に提出された書類が、戦後になってから川崎市に返却されたものです。東京の場合は残されている資料は部分的で、特に大田区や世田谷区の耕地整理の資料はほとんど残っていません。大田区では2、3点しか見つかりませんでした。川崎市の場合は県に提出した組合の申請書や、土地所有者の名簿、計画書、設計書などの書類がまとまって残っています。

組合方式の例外としては、不動産会社に関わったものがありました。例えば大田区、田園都市株式会社です。後に東急電鉄にも発展していったものです。渋沢栄一さんの田園都市構想による田園調布の区画整理は有名ですが、あの田園調布から千束池のほうまで大掛かりな区画整理が行われています。川崎市の場合は、新丸子の周辺で同じような動きがありましたが、それ以外はほとんど組合方式です。しかし、この組合方式が後でいろいろと問題を起こすことにもなっています。

(3) 多摩川改修事業と耕地整理

次に多摩川改修工事との関係で耕地整理を見ていきたいと思います。多摩川改修工事は、大正7(1918)年度から昭和8(1933)年度まで16年間かかって、下流から中流域、右岸では橘樹(たちばな)郡高津村の久地(現在の高津区久地)、左岸では東京府北多摩郡砧村宇奈根(現在の世田谷区宇奈根)までを改修した工事でした。なぜ16年もかかったかという、途中で関東大震災があったからです。しかし実は、この多摩川下流改修工事は当初の計画では、もっと着手が遅れるはずでした。しかし、今の幸区から中原区地域、御幸村でアミガサ事件といわれる大きな住民運動が起きました。これは、早く堤防をつくってくれという県庁への嘆願運動、デモ行進で築堤運動でした。この運動や沿岸部に近代工場が進出してきた機運に押され、内務省は多摩川の改修工事への着手を当初予定より10年ほど早めています。

河川改修では、川がたくさん掘られましたが、この時に出た土砂が耕地整理にも深く関わっています。

この写真は、羽田猛(はだたけし)さんが「目でみる中原街道」という本の中で紹介している写真で、今の丸子橋そばの公園がある辺り、川崎側です。蒸気機関車、一種の軽便鉄道が砂利を運んでいます。多摩川改修工事で掘削した砂利です。この砂利をどうしたかという、例えば道路に撒きました。



砂利を運ぶ計便鉄道

2番目は東京側の写真です。現在の大田区に鶺鴒の木と嶺と言うまちがありますが、“嶺”と言う字と、鶺鴒の木の“鶺”という時で、嶺鶺(れいてい)耕地整理組合という組合を二つの村でつくりました。鶺の字は中に弟という字がありますから、それで“てい”と読ませたんですね。

この耕地整理の完成時に記念写真帳が出されていて、その中にいろいろ面白い写真がでています。この写真では馬がトロッコを牽いています。“馬トロ”と言うらしいですね。私は“ばとろ”と読んできたのですが、それで良いのでしょうか。他にも馬がトロッコを引っ張っている写真がたくさん出てきます。人がトロッコを押している写真もあります。改修工事の終わりごろになるとトラックが出てきます。トラックに砂利を積んでいる写真も1枚ありました。

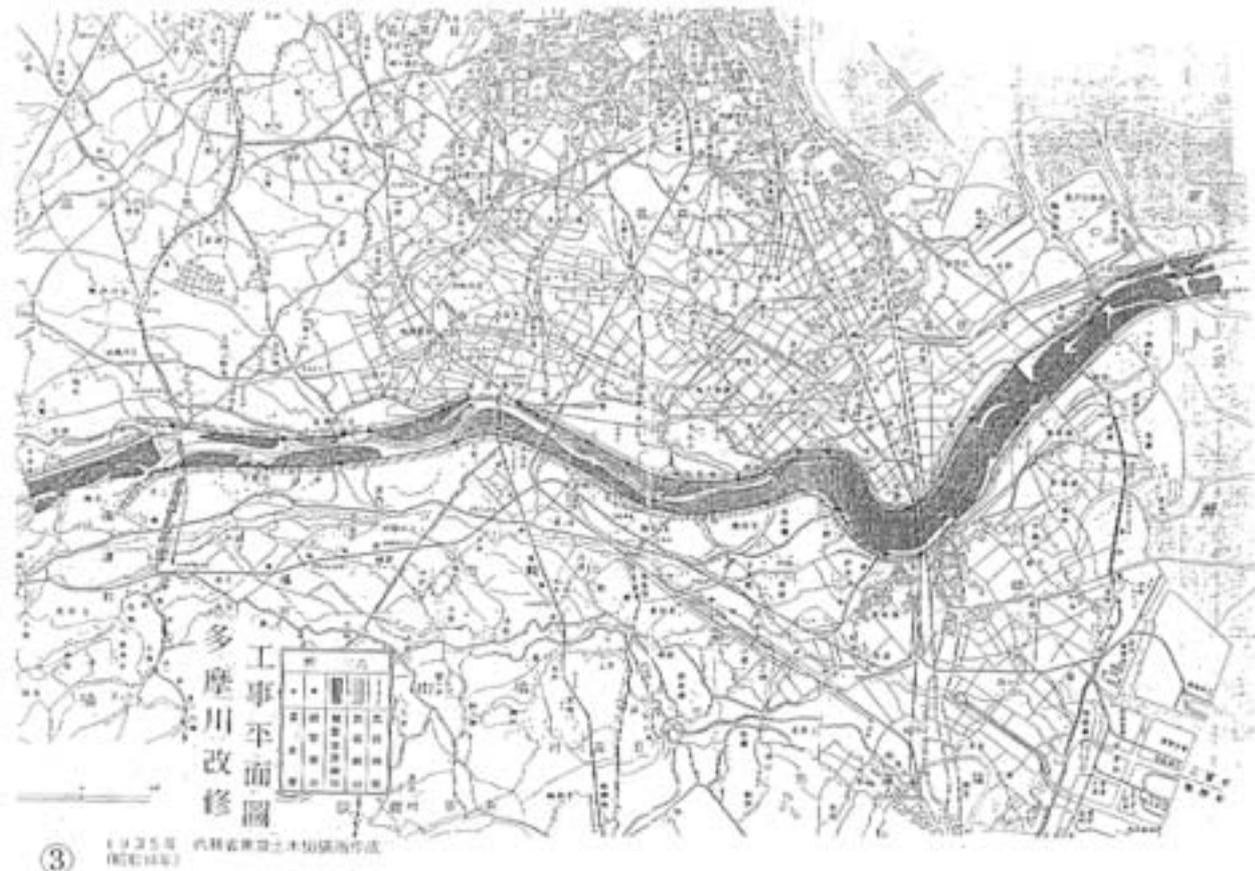


「嶺鶺耕地整理完成写真帳」から

この写真は堤内地の様子です。先ほどの馬トロの写真は堤の外で、川の方ですから堤外地です。こちらは人家があるほうで堤内地です。この写真のように道を

まっすぐにし、十字になる道を横に付けていきました。これらはほとんどが砂利道で、ここに河原の砂利を敷いていきました。その様子がわかる写真です。両側には並木をつくろうとして、若木が点々と植えられているのも見えます。耕地整理の進み方の状況が現れている写真です。

多摩川の改修工事では、非常にたくさんの土砂が出ました。その土砂を、堤防を高くするところに使っても、まだ相当有り余っていました。当時の内務省はこの剰余土（じょうよど）を処分しなければなりませんでした。これは実は非常に大きな悩みだったようです。



「多摩川下流改修工事平面図」

上は「多摩川下流改修工事報告書」に出てくる工事平面図です。右端が河口のところです。

多摩川の土手の切れている所が 0.0 km と書かれていますが、多摩川の河口原点はこの時に決められたんだろうと私は思っています。今の河口原点の表示の位置と、埋立地との関係などを考えても大体一致しています。そこからずっと両岸にこういう形で均等な堤防を造っていきます。そして中を開削し、浚渫します。その土量は全部で 7,523,737 m³ だったといいます。その内約半分の 3,211,554 m³ は新しい堤防や高水敷に使われました。高水敷というのは、低水敷に対しての高水敷で、いわゆる洪水の時に水があがるような敷地をとったものです。低水敷の方は常時水が流れていますが、高水敷は大水の時に水流を滞留させるためのものです。

しかし、まだ半分以上が剰余土としてあまっており、これをなんとかしなければなりませんでした。これを民間に捨てたということで、「民地捨土」と言い、耕地整理事業に使わせました。捨土ですから無料でしたが、その運搬の費用は自分達で持ちなさいということになっていました。

実はこの利用者が負担した費用の総額がこの報告書に出ています。335 万円です。当時多摩川改修工

事でかかった総費用が 721 万円ということですから、その約半分の金額です。総工費の中にはもちろんこの 335 万円は入っていません。

運搬費にそれだけかけて、無料でもらった剰余土を堤内地の埋め立てに使ったのです。つまり水田を埋める、沼を埋める、そして地ならしをするために使ったのです。左岸の大田区の方でもかなり使われました。六郷羽田周辺の耕地整理で使われたのは、ほとんどがこの多摩川改修工事の剰余土でした。多摩川の川っ縁から放射状にトロッコの専用線を敷いて運びました。土砂の欲しい人はお金を払って運んでもらったのです。そのトロッコを引いたのは、民間だったのか、内務省だったのか、どこだったのかは分かっていません。この民地捨土の運搬については、追究していくと、非常に面白い問題が浮かび上がってくるかもしれません。

左岸では 319 町 6 反余の耕地ができ、その剰余土は、京浜第一国道の拡幅や、鉄道では京浜電鉄、目蒲電鉄、池上電鉄の複線化にも使われました。このように多摩川の砂利は、東京や横浜のまちづくりに非常に重要な役割を果たしているはずなのですが、その辺りの解明はまだほとんどなされていません。

右岸では東京側より少ないのですが、172 町 7 反余の土地に剰余土が使われました。広大な富士紡績の工場用地の造成は、この多摩川の剰余土が使われたと書かれています。

(4) 市街地の造成と耕地整理法

最後になりますが、なぜ宅地化に盛んに耕地整理法を使ったのかということです。これは実をいうと、他に適用する法律が無かったからです。今では区画整理は都市計画法に基づいて行われますが、都市の区画整理についての法制度の整備が当時は遅れていたのです。日本の近代化は非常にアンバランスで、特に都市の問題については、明治の頃には法律が全然ありませんでした。大正時代になってようやくできてきます。それも耕地整理で都市化がはじまることをにらんで急遽でてきたものでした。それまでは、耕地整理法をたくみに使いながら、土地の改良事業を行いました。農業の増産を目標とするよりも、農耕地そのものを改良して、宅地にしていくために使ったわけです。

都市計画法は大正9（1922）年にできているのですが、当初は誰も利用しませんでした。なぜかという、大きな区画整理事業をするとすると、誰かからお金を融資してもらわなければなりません、その面では農耕地の方が利息が低くて断然有利で、公の補助金も出たからです。また、組合員が提供した土地を纏める際に、減歩（げんぶ）といって公共用地として提供しなければいけない分が定められているのですが、その手続きが都市計画法になると面倒くさかったのです。このようなことから、都市計画法ができた後も、耕地整理法による市街地化がずっと進められました。これでは困るということで、国は昭和8（1933）年に耕地整理法を改正し、これ以降都市の区画整理事業は耕地整理法でやってはいけない、耕地整理法はあくまで農地整理だけとし、都市の区画整理は都市計画法でやらなければいけないと切り替えたのです。ですから、昭和8年の直前に駆け込みで、あちらこちらで耕地整理が行われました。昭和5～7年辺りに申請されたのはほとんどそうであろうと思います。

耕地整理法では無秩序といいますか、行政が入り込む余地がありませんでした。また複数の耕地整理組合の地域にまたがるような広域的な区画整理もできませんでした。また全て私的な関係の組合でしたから、全て組合員である土地所有者たちの思惑に沿って進められ、道路の幅にしても、公園の整備にしても、やりたいようにやっていました。いつまでも耕地整理法でやっているのは、計画的な都市の造成ができなかったのです。

当時は自動車社会が来るだろうという予想はなかなかできませんでした。戦前は国産の車はなく、バスでさえもエンジンは全て外車でした。箱だけ日本でつくりました。銀バスと言われた臨港バスもそうでした。

私の父は山形県から出てきて、タクシーの運転手として長年働き、一生を終えました。二十歳くらいで上京して、ハイヤーの店に見習いとして入り、下働きを何年かして、自動車の免許をとらせてもらいました。昔はビックだとか、クライスラーだとか、車種ごとに免許を受けたそうです。88歳で亡くなりましたが、父の自慢は「私は全ての車種が運転できる免許を取得した数少ない人間の一人だ」ということでした。

そんな時代に都市の区画整理を行うということは大変なことでした。道幅は江戸時代よりは確かに広くなり、直線化され、くねくねしているような農道ではなくなりましたが、舗装道路はまだなかなかできず、多摩川の砂利を運んで来て、道に撒いていました。江戸時代は神社の境内や江戸城の周辺などに玉砂利が敷かれることはありましたが、道に砂利をまくことはありませんでした。大八車がうまく通れなくなるからです。江戸時代から多摩川の砂利は掘られ、運ばれていたようで、鉄道に敷かれた多摩川砂利も相当多かったようです。

昭和になってできた第一京浜国道は舗装された道路でしたが、その他の道はまだ砂利道でした。先ほどの昭和5、6年頃の地図を見ても、区画整理により、道が縦横十文字に走っている箇所もありますが、

まだ道幅が狭かったり、舗装されていないことも多いことがわかります。

耕地整理のもう一つの大きな問題は、公共用地が十分とられなかったということです。例えば公園です。こうした公共用地を確保するということは、まち全体を俯瞰的に見た都市計画がないとなかなかできません。申請さえすればよい組合方式で、規制のない形のままどんどん進んでしまいましたから、後から道路が狭かったり、つながっていなかったりといったような色々な問題が出てきました。

川崎区、幸区は今、道がちゃんと整備されているじゃないかと思われるかもしれませんが、これは戦災で焼けた後のもので、耕地整理によるものではありません。川崎区は戦災で半分以上が焼け野原になっています。その後の復興は市が主導して、市街地の再開発を行っています。当初は 100m 道路の計画さえもあったようです。2 本つくる予定だったそうで、その内の 1 本は現在の産業道路です。どうしてそれができなかったかという、占領軍、GHQ からクレームがついてご破算になったとのこと。戦後の土地区画整理事業が、今の小道とどのようにつながっているのかという調査検討はまだどなたもやっていません。昔の地図と今の地図を突き合わせながら、どこに昔の耕地整理の道が残っているのかなど調べることは、大変手間のかかる作業ですが、面白い歴史がわかってくると思います。私もやってみたいのですが、なかなか他にやることもあり、できない状況です。どなたかやってみてはいかがでしょうか。

【質疑応答】

Q：資料の大正 14（1925）年にある田島町堤外の組合というのは、どこの地域なのでしょう？

A：田島町には川なんて無いじゃないかと思われたのかもしれませんが。これは私の想像ですが、海だと思います。海岸堤、昔からの潮除け堤です。田島町の場合は、そこしか考えられません。海しかありませんから。

Q：昭和 4（1929）年の渡田塩浜の組合は今の塩浜のあたりのことでしょうか。

A：そうではなく、渡田にも塩浜という地名がありました。塩浜という地名はけっこうあちこちにありました。現在の塩浜と言っている地域とは異なります。

Q：桜本の近くに“なかどめ耕地”と呼ばれる地域があるのですが、耕地組合と関係があるのでしょうか。

A：耕地とつく地名はあちらこちらにたくさんありました。耕地整理とは関係がないと思います。明治 22 年に地方制度が改正され、田島村、大師河原村などの大きな村ができ、それまでの村は大字になります。例えば田島村大字渡田字なかどめ耕地というような小字の名称だろうと思います。